1．熊本県下における装飾古墳の発見と研究の歴史

乙　益　重　隆

熊本県下において最も早くから開口し，人びとの目にふれた装飾古墳は，八代郡竜北町大野の大野窟[1]であろう。この古墳は石室内の羨道部右側壁に，僧道榮なる者の撰述した「明應六年五月十八日」（1497）木野但馬守相直の願文が彫刻されている。しかし当時はこの石室が古墳の内部施設であるという認識どころか，こんにち僅かに消え残る彩色文様に対する関心さえなかったのであろう。また，熊本県荒尾市平井区上井手三ノ宮神社の前方後円[2]墳から，県境をこえること北に約70mには，福岡県大牟田市東萩ノ尾町萩ノ尾弁天山古墳[3]がある。この石室内部に観音菩薩が建立されたのは元禄5年（1692）8月のことであった。それは羨道部東壁に残る奉行中村伊右衛門の建立した碑銘によってうかがわれる。おそらく石室はそれ以前に開口していたのであろう。そして石室内部奥壁に赤で描いた同心円文や円文・楯や舟の絵があることは知られていたにちがいないが，何の記録も残っていない。また熊本県側に位置する三ノ宮神社古墳も開口年代こそ明らかでないが，武装石人1体を伴い，前方部の南側凸地にその脚部1個があり，注連縄を張って祀る。その傍に長方形の板状石があり，[5]表面に三角形連続文を線刻し赤と青の彩色がみられる。おそらく三ノ宮神社古墳の石材であろう。（『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊41頁参照）

また『肥後国志』八代郡種山手永早尾村の条には大王山叢祠について次のようにみえる。

大王山上二祠アリテ神体六軀夫婦ノ像トモ衣冠和朝ノ風儀ニアラス里俗ハ唐ノ大王ト云（中略）山上ニ石櫃アリ船櫃ト稱ス長二間可リ切石九枚ヲ以テス貞享ノ比（1684—1687）里人之ヲ発キシニ中ヲ船形ニシテ鉄ノ鳥居剣香爐ナト有シト云

この古墳こそ八代郡宮原町早尾，腹巻田（はらまきだ）大王山3号古墳[6]のことであろう。昭和33年『宮原町郷土誌』の資料調査にあたり，墳頂部の測量中に再発見されたものである。内部構造は割石小口積の竪穴式石室で，その容積一ぱいに舟形石棺が安置されていた。石室は奥行3.70m・幅1.10m，石棺の長さ3.10m幅90cmを有し，切妻の屋根形を呈した棺蓋の両側面に，ほぼ方形に彫りくぼめた部分が3箇所ずつ左右6箇所あり，おそらくこれらの彫刻も装飾の一種であろう。

また梅原末治氏によると宇土郡不知火町鴨籠坊ノ平古墳が盗掘されたのは，正徳5年（1715）11月のことであった。[7]「当時肥前国より石工新三郎外1名，同村八尾神社の鳥居建設の為来村し，工を終りて後私に夜間に此の塚を発きて，遺物を奪ひ去りしものなり。」という。[8]しかし棺蓋に彫刻された直弧文B型の美事な半載文様と彩色については，何らの伝承も残っていない。

さらに『肥後国志』五町手永，釜尾村常福寺の条によると

天台ノ古跡ト云此古跡ノ後ロ山傍畑ノ際ニ窟アリ始ヲ知ラス岸崩レテ埋レ居レシヲ明和六年（1769）ノ春発見セリ口窄ク内ハ一間四方計リ切石ノ壁天井ニヶ向ノ石壁朱ニテ塗リ桔梗ノ紋アリ常福寺ノ粮倉ニテヤアランカ後又埋メ置タリト云。

この古墳こそ大正10年3月3日，国の史跡となった飽託郡北部町釜尾古墳[9]のことである。桔梗の紋というのは，石室内奥壁にそって組立てられた石屋形の前面および内面に，赤・青・白で描かれた双脚輪状文のことで，切石の壁とあるのは割石積の誤である。いずれにしても県下における，古墳石室内の装飾文様のことが記録にみえる例としては最古に属する。

また『肥後国志』が編纂された明和9年（1772）以前に知られていた古墳のうち，装飾を有する古墳をあげると次のようなものがある。まず山鹿郡山鹿手永鍋田村の条には産塚のことがみえる。すなわち

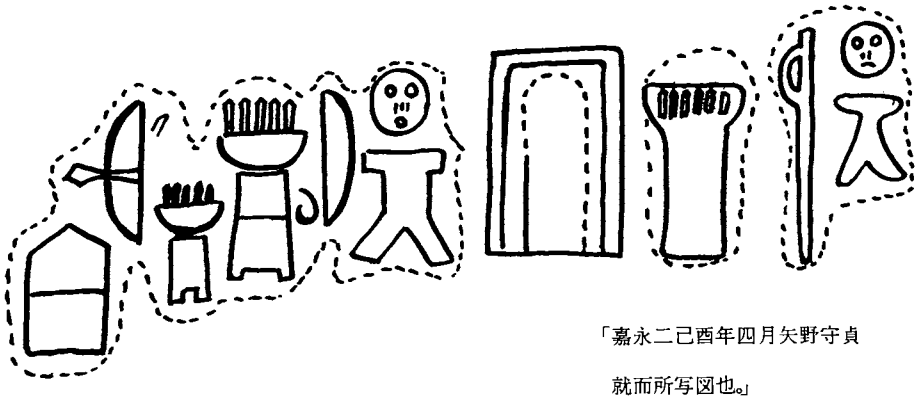
塚ニ穴アリ其内甚タ狭シ乳味乏シキ婦此穴ニ祈テ験アリ賽ニ醴ヲ供ス常ニ醴ノ香アリ

とあり，おそらくこの記事は山鹿市城西福寺のチブサン古墳[10]（前方後円墳）のことであろう。醴（こさけ）というのは甘酒のことで，この信仰行事は今なお継承されている。しかし石室内部の装飾文様については何ら記されていない。なお，『肥後国志』同手永の条にも「産塚二ヶ所アリ鍋田村条下ニ同シ」とあるのは，チブサン古墳の近くにある巨石積の石室を有するオブサン古墳（円墳）のことであろう。去る昭和54年度の実測調査時に，[11]この石室内壁にも三角形連続文の線刻があることが判明した。さらに同村円通寺跡の条に「廃跡ノ下ニ城内二丸ヘノ切通シノ小径アリ岩地蔵ト云ヘルハ此所也岩壁ニ岩地蔵幷穴墓アリ」とあるのは，全体の地形配置からみて城（じょう）横穴第6号のことであろう。「岩地蔵」というのは横穴入口に彫刻された人物像のことらしく，[12]他に楯や靫・弓などもみられる。ちなみに「城内二丸」というのは，城（じょう）氏の居城のことである。

また『肥後国志』中村手永津袋村の条には鹿本町津袋御霊隠塚について「林間ニ一石窟アリ御霊塚ト云口狭クシテ奥ハ九尺四方大石ヲ疊テ築キ上ノ大石ニ胄ノ鉢ノ形ニ穿チタル穴アリ云々」[13]とある。この古墳は石室奥壁ニ白と赤で靫と鞆を，東壁に靫を描いているが，これらの装飾については何らの記載もない。尚，この古墳の東隣に御霊塚という円墳があるが，内部における装飾の有無は明らかでない。[14]

同じ『肥後国志』の上益城郡鯰手永陣村の条には座敷塚のことがみえている。

当村ノ上ノ野ニ塚アリ西ニ向テ穴アリ前ニ大石ヲ置ク穴ニ這入ルコト二間ハカリ石ヲ疊ム奥ニ至レハ方二間許



「嘉永二己酉年四月矢野守貞
就而所写図也。」

付　第1図　山鹿市鍋田横穴第27号、崩壊以前の壁面彫刻（『筑後将士軍談』より）

ノ石穴アリ東ノ方大石ヲ壁ニシテ朱ニテ塗リ蛇ノ目ノ紋三ツ付タリ何レノ時何人ノ所為タルヲ知ス里俗座敷塚ト云

この塚は今の上益城郡御船町大字滝川にする今城大塚古墳のことである。墳丘が崩れ，石室の一部が破損しているが，[15] 石室内部の奥壁に円文や楯・靫などを描いており，とくに「蛇ノ目紋三ツ付たり。」とあるのは注目すべきで，おそらく円文三個のことであろう。

次に八木田政名の『新撰事蹟通考編年考徴』巻七（天保12年・1841年完成）によると次のような文がみえる。

芦北郡日奈久田河内村ノ傍古城山ノ続キニ窟アリ其始不知窟上草樹森鬱小堂アリ堂ノ側ニ巨石アリ里民夏時暑ヲ避ケ又相集テ藁ヲ擣ノ台石トス其音碪々トシテ地ニ響ク寛政年中（1786－1800）一人云此音尋常ノ石ニ非スト土ヲ採リ石ヲ発スニ其下沖空ニシテ深ク広シ乃チ梯ヲ卸シ炬ヲ乗テ内ニ入ニ石ヲ綫テ壁トシ覆トス高サ一丈余広サ二間余方其内地並ニ小キ截石ノ圻界アリ西ニ口アリ堅横三尺ハカリ壊テ啓カス東城跡ノ方ニ石戸アリ疑クハ洞ロナラン石戸ノ上ニ石段アリ段上ニ一短刀及錣金物小キ鉄輪等アリ石戸ノ前ニ三人ノ体骨アリ初メ里人ノ礎トセシハ組留ノ上石ナリ事官府ニ白ス郡代命テ石上ニ壇祠ヲ設ケ以テ祀之勿復開

この巨石下に発見された石室は，今の八代市日奈久新田町田川内（甲）古墳のことである。記述が具体的で詳細な点はきわめて[16]貴重で，おそらく実見録によったものであろう。この古墳は縄文中期の貝塚と重復しており，石室内部の石屋形や石障に同心円文や円文を描いた顕著な装飾古墳である。かつて大正5年（1916）京都帝国大学一行の調査時には5体の人骨を出土しており，おそらくうち3体は寛政年間に発見された分であろう。「錣金物」とあるのは挂甲小札[17]の残欠らしく「小サキ鉄輪」とあるのは刀剣外装金具の一部であろうか。

また『肥後国年歴』によると，安政4年（1857）5月13日，益城郡沼山津手永井寺村で古墳が発見された。それは偶然にも地震によって藪が崩れ，[18] 古墳の石室が開口したという。この古墳こそ石障や羨門などに直弧文A型・B型・C型その他を複雑なばかりに線刻し赤・青・白・緑の四色で塗りわけた図柄を有する，上益城郡嘉島町井寺古墳のことである。当時熊本から騎馬の武士が検分のためにやってきたというが，その武士も古墳の装飾が何であるかわからなかったとみえ，何の記録も残っていない。

さらに中島広足の著『かしのしずえ』[19]上巻によると「磐井の墓」という頃があり，筑後国上妻郡吉田村（今の福岡県八女市吉田）の大神宮前（岩戸山古墳）にある石人や，正福寺の石馬，一条石人山の石棺，山鹿市長岩108号上段の大の字形に立つ人物像などを描いているが，それらの多くは矢野一貞の著『筑後将士軍談』の写しであった。とくに矢野一貞のこの本によると山鹿市鍋田横穴27号外壁[20]について，今では崩壊して見ることのできない，右半分の靫と大刀・大の字形に立つ人物像が写されているのは貴重である。そして彫刻群の下段に「嘉永二已酉年四月，矢野守貞就而所㆓写図㆒也」とみえている。その他にも同書には「肥後国山鹿郡鍋田村石窟外面所㆑鐫立物以㆘与㆓宮田窟中赤象㆒足㆘相徴㆑追而贅㆑之」と記し，7号横穴外壁の弓に矢をつがえた浮彫をはじめ12号外壁の靫2個その他の彫刻が写されている。文面にみえる「宮田石窟中赤象」というのは今の福岡県浮羽郡浮羽町楠名（くすみょう）重定古墳石室内部に描かれた赤色の靫群のことである。当時平田篤胤系の国学者たちは，この靫のならぶ絵を神代文字であると解した。しかるに矢野一貞はこの絵を古墳封土にならべた埴輪と同様な立物であると解し，これを朱象と称した。そして朱象は宮田石窟だけでなく，鍋田の石窟にも彫られ，今更贅言を要するものではないと称しているのはまさに卓見である。

その他にも慶応2年（1866）頃木原楯臣の著といわれる『蘇渓温古』によると，阿蘇郡阿蘇町手野の上御倉古墳と下御倉古墳について次のようにみえている。

北宮鳥居ヨリ三十間ハカリ西ノ畑中ニ上御倉下御倉ト云大ナル塚二ツアリ共ニ其下ニ穴アリ上御倉ノ穴ノ口ハ竈ノ口ノ如クニシテ五間程匍匐シテ入レハ高九尺上下左ムカ右ヲ右タタ以テ入四間ハカリアリ奥ニ幅ニ間高八尺程ノ切石アリ此ヲ障子石ト云其前ニ幅三尺長七尺程ノ石棺アリ此穴ヲ土人風穴ト云夏日ハ毒虫多クシテ入ヘカラス下御倉ノ穴

ハ埋レテ入ルコトヲ得ス

文面にも見える通りこれらは巨石積複室の石室古墳で，県の指定史跡になっている。『熊本の装飾古墳』阿蘇郡の項によると，上御倉古墳には彩色による装飾があるという。それは前室入口の前に倒れていた板石の裏側に，白色で高い山のような形を描き，山のほぼ中央に幅3cmぐらいの線を上下に通し描き，その下段には黄色地に黄色の人物像が上半身だけ残るというが確実性を欠ぐ。

明治時代になると新しい西洋文明の影響をうけて，あらゆる学問は飛躍的発展をとげた。中でも考古学は従来の単なる懐古趣味や，奇異なものに対する興味本位の解釈から前進し，科学的な考証を本位とする学問へと成長しつつあった。それとともに重要な遺跡・遺物の発見が相つぎ，県内にも多くの研究者が輩出した。まず明治2年（1869）には装飾古墳ではないが玉名市繁根木の伝左山古墳が発見され，同6年（1873）には有名な玉名郡菊水町江田船山古墳[21]が発掘され，多くの副葬品を出土した。一方明治8年（1875）5月には『博覧会品物録』[22]が刊行され，それによると当時熊本では盛大な博覧会が催された[23]。出品物には書画骨董品・古器物類から金銀製品，産業関係の機械器具類，農産物・水産物・岩石にいたるまで雑然とならび，中に勾玉・管玉をはじめ金銀製耳環銅矛など，十数点の考古資料もみられる。その目的は巻頭言に云うように「未タ見サルヲ見未タ知ラサルヲ知ル人間ノ楽ミ之ヨリ大ナルハナシ」という，珍品供覧を兼ねた殖産興業にあった。こうした機運はやがては観聚館（明治28年・1895）や物産館（同35年・1902）の設立となり[24]，やがて大正のはじめ頃県教育会の運営する明麗館の設立をみるにいたった[25]。

明治12年にはかの東京大森貝塚を発掘調査したエドワード・S・モース（Edward, S, Morse）が熊本にやって来た[26]。そして熊本から人力車で八代へ行き，その途中大野貝塚の発掘を行っている。しかもその時，貝塚付近にあたという舟形石棺蓋をスケッチしている。その棺蓋は欠損品であったが両側に環状縄掛突起を有し，内面には方形区画を亀甲状にあらわした一種の装飾があったことが知られる[27]。また明治13年熊本県庁では，内務省よりの布達甲第206号にもとずき，県下各地において古墳が発見されたばあいの調査報告を命じている。おそらくそれらの報告控であろう。熊本県立図書館には『古墳発顕記録』と称する精細な絵入りの公文書綴が残っていたが，昭和20年の戦災で焼失したという。幸い十条製紙八代工場の夕葉文庫に所蔵する写本や花岡興輝氏の写本，故丹辺総次郎氏の抄写本があり，原本のおもかげを知ることができる。それによると明治16年（1883）3月1日，宇土郡花園村列戸長代理野口盤平は，今の宇土市立岡の晩免と潤野において，古墳石棺を発見した旨，見取図を副えて県庁に報告している。中でも晩免の石棺は切妻の家形組合せ式で，蓋の前後に縄掛突起を有し，左右両側に環状縄掛突起を設けた特異なものであった。棺身内部には長辺に刀架状突起と16花弁の菊花文を，短辺にも刀架状突起と円文らしきものをあらわす。潤野の石棺は家形の寄棟式で，左右両側に環状縄掛突起を設け，短辺側の縁にそって「吾人，平資盛」の後世の偽刻文字があった[28]。棺内の長辺には三角形連続文とその下際に刀架状突起を彫り，両突起の間と下際にはそれぞれ円文らしきものをあらわす。そして晩免石棺のある小山が「ミサキ山」とよばれ，毎年正月十二日に「テンノフ」祭が行われ，さらに近傍に平家伝説が残るところから，後には安徳天皇陵墓参考地に指定されてしまった。いかに考古学上の智識に乏しかった当時とはいえ，よくも騙されたものである。

明治20年代になると著名な研究者の熊本をおとずれる者が多く，たとえ断片的とはいえ新しい資料をつぎつぎに学界に紹介した。まず若林勝邦氏は同23年に「肥後に於ける石器時代遺蹟調査報告」『東洋学芸雑誌』[29]を発表したのをはじめ，同年には「肥後旅行談」『人類学雑誌』を，同25年には「肥後の古墳」『同誌』を発表し，後の研究者たちに多くの手がかりをもたらした。また先にのべた立岡の晩免と潤野古墳のことが，小杉榲頓氏によって『帝国史蹟取調会報』第3号に発されたのも25年12月のことであった[30]。さらに明治30年代になると中村徳五郎・和田千吉・大野延太郎氏らの旅行踏査が相ついだ。そして井寺古墳の直弧文壁画が各種の文献に紹介され，或は阿蘇中通古墳群（中村徳五郎氏は明治36年2月踏査）のことが世に知られるようになったのも，これらの人たちの現地踏査成果によるものであった。

その頃になると地元研究者の活躍はめざましいものがあった。まず福原岱郎氏は装飾古墳ではないが明治30年10月「玉名郡繁根木古墳出古物参考書」を執筆し，ついで本多氏「肥後国玉名郡繁根木村の古墳及び発見品」『考古学会雑誌』2巻2号（明治31年）を発表した。そして同32年には『同誌』2巻9号と同10号にわたって「肥後雑見」を連載し，八代郡竜北町高塚の装飾ある石棺や大野窟などを巧みなスケッチと解説で紹介した[31]。これらの記事が後に浜田耕作氏を中心とする，京都帝国大学考古学教室の行った装飾古墳調査時の，有力な手がかりとなった。

日露戦争後から大正のはじめにかけては，波多巖氏の活躍がめざましかった。氏は当時旧制鹿本中学の教諭をつとめながら多くの遺跡を調査し，とくに『肥後国菊池河流域に於ける横穴及び古墳（一・二・三・四）』を『考古界』5巻3・9・10号（明治38・39年）に発表し，主として山鹿市一帯の古墳や鍋田・長岩などの装飾ある横穴を紹介した。そして同37年（1904）頃には学生某（中島秀雄氏のこと。）の報告により山鹿市臼塚の石人を踏査し，これが端緒となって県下各地の石人が発見されるにいたったという[32]。ついで同42年には「チブサンの石人につきて」を『考古界』7巻10号に発表。とくに大正元年には「肥後国平小城村古墳チブサンの石棺及模様に就て」を『考古学雑誌』3巻2号に絵入で報告し，これによってチブサンの装飾文様は全国的に知られるにいたった。

大正時代に入るや各地で装飾古墳の発見が相ついだ。柴田常恵氏は同元年夏天草・八代・芦北・鹿本の各地をまわ

り，幾つかの装飾古墳や石人石馬を撮影し学界に紹介した。また同２年夏和田千吉氏は御船町今城大塚古墳の壁画を模写し，重要な手がかりを残した。熊本市小島町千金甲第１号墳の装飾壁画が発見されたのも同２年のことで，熊本師範学校生某によって報知され，角田政治氏の紹介するところとなった。[33] また玉名市石貫ナギノの装飾ある横穴群は，地元石貫小学校長高橋六郎氏の目撃談から，大槻弘毅氏の現地踏査（大正14年）によって確認され，[34] 人吉市城本横穴群（一に大村横穴群とも云う）は同５年春，下林繁夫氏によって確認され新聞に発表されて以来，世に知られるようになった。[35] また下益城郡城南町大字板野坂本の同心円文ある古墳石材は，同５年冬熊本第一師範学校生徒某によって発見され，また同郡松橋町宇賀岳古墳の装飾文様は，同年12月平野乍氏によって発見された。[37]

こうした一連の発見が相ついだ結果，[38] 同５年12月下旬から同６年１月にかけて，浜田耕作・梅原末治氏による県下の装飾古墳の全面的な調査が行われた。この時の調査には県内における多くの研究者の協力があった。当時の記録によると矢野寛・古賀徳義・笹原助・角田政治・大槻弘毅・堀亮策・武田又男などの人びとの名がみえている。[39] こうして同6年3月30日には，わが国の考古学史上に偉大なる画期をもたらした『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』（京都帝国大学文科大学考古学研究報告，第１冊）が刊行されたのである。その内容は６章からなり，県内における12の装飾古墳と20箇所の装飾ある横穴の他に，福岡県久留米市日輪寺古墳の調査が収録されている。このように京都帝国大学考古学教室による装飾古墳の組織的調査は，全国的な関心をあつめるとともに，県下の研究者に多大の影響をもたらした。

一方，熊本県では大正４年12月10日付『熊本県告諭第一号』をもって「史蹟調査保存ニ関スル規程」を発令。同日付をもって『熊本県令第二十五号』による「名勝・旧蹟・古墳墓・天然記念物ニ関スル規程」を制定し，これらの登録台帳を作成することを条文化した。この規程は大阪府とともに全国に先駆けて制定したもので，[40] ついで同６年には三重県と京都府が，同７年には東京府が制定している。[41] それほどに当時の熊本県には文化財に対する尊重 愛護の念がたかまった時代であった。

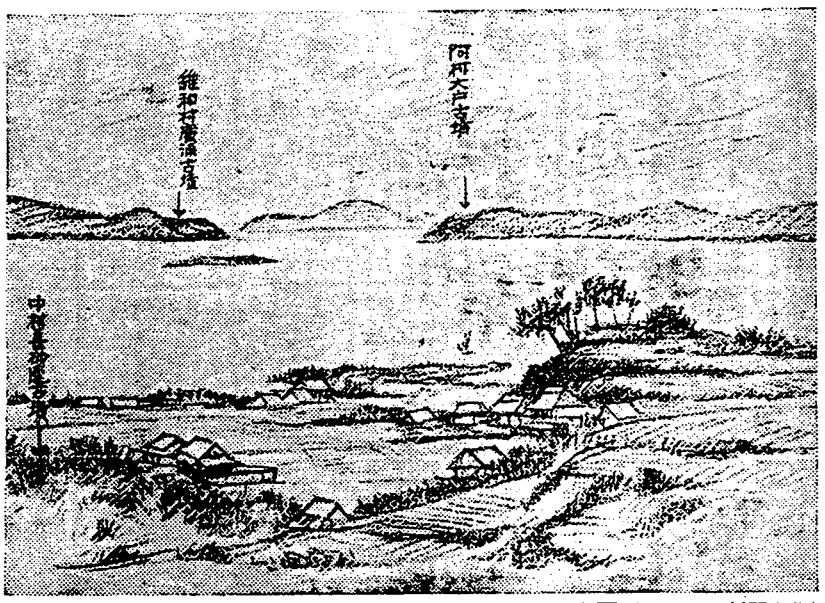
たまたま大正６年３月には八代市岡谷川門前において，開墾に伴い新に装飾古墳の石材が発見された。それはかって明治17年（1884）変形獣首鏡１面と倣製内行花文鏡２面を伴った石棺の北隣にあたり，板状石に円文と同心円文を彫刻したものであったが，すでに古く破壊され明確なことはわからなかった。

ついで大正７年２月には天草郡大矢野町千束蔵々島（せんぞくぞうぞう）（当時の維和村）広浦において，[42] 装飾古墳が発見された。現地は天草上島の阿村大戸鼻古墳群の対岸，広浦岬の突端部にあたり，かつてはサムライノ塚と称する数基の古墳があったという。この他に堀鉱業株式会社というダイナマイト工場が設立されるにあたり，それらの古墳が破壊された。たまたま平野乍氏は大刀に刀子を重ね彫りした石材と，刀子ならびに円板に柄をつけた形と，半円板に柄をつけた形の彫刻ある石材を採取されたといい，それらの２枚は現在県立美術館に出陳されている。（済々黌高等学校所蔵）その他にも石材の一部２枚が京都大学考古学陳列館に所蔵されている。この古墳は本来の形が明らかでないが，おそらく大戸南古墳のような石棺系の小石室古墳であったとみられ，[43] 果してその一部かどうかわからないが長さ約1.30cm・幅約60cmの板状石に円文の彫刻のならぶ板状石が，現地の蜜柑山の崖線に横たわっている。また京都帝国大学考古学教室では浜田耕作氏を中心に梅原末治・島田貞彦・榊原政職氏らによって，[44] 再び九州内における装飾古墳の調査が行われた。調査は同７年１月と４月に行われ，同８年10月15日には「九州に於ける装飾ある古墳」『京都帝国大学考古学研究報告』第３冊が刊行されるにいたった。この報告書の内容も熊本県内が主体をなし，10箇所の装飾古墳のほかに，福岡県久留米市浦山古墳の石棺が含まれている。この時の調査にも矢野寛・古賀徳義・下林繁夫・平野乍・角田政治氏などの協力があったことは，同報告書の序言にみえる通りである。

こうした機運に相俟って県内の有力な装飾古墳はつぎつぎに国の史跡に指定された。まず大正10年３月には井寺古墳と千金甲甲古墳・同乙古墳・釜尾古墳・大村横穴群・石貫穴観音横穴・同ナギノ横穴群の７箇所が，ついで同11年10月にはチブサン古墳・鍋田横穴群の２箇所が史跡に指定された。そして昭和２年３月には「熊本県下に於ける内務大臣指定の史蹟と天然記念物」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第４冊が刊行されたが，その内容は一部の追加調査の成果以外は，『京都帝国大学考古学研究報告』第１冊と第３冊の抄録であった。

昭和時代に入るや県下における装飾古墳に関する研究は，すでに大正時代に出尽した感があり，新しい遺跡の発見も研究論文や調査報告書にもめぼしいものがなかった。わずかに昭和５年５月には小林久雄氏によって，下益城郡城南町東阿高牛頸の横穴群６箇の一つから，扉石の表面に４条の縦線の下際に１条の横線を沈刻した装飾が発見された。その調査成果は氏の追悼論文集『九州縄文土器の研究 』（昭和42年）218～219頁に収録されている。また昭和９年４月７日には天草郡大矢野町（旧中村）大字長砂（ながざれ）連字上貝場の丘頂に，琴比羅神社を建立するにあたり，横穴式石室墳が発見された。それは右側の石障に直弧文Ａ型とＣ型，および二段にならぶ４個の方形の突起を，左障には直弧文Ａ型を浮彫にしていた。この古墳は下林繁夫氏と坂本経堯氏によって調査が行われ，その結果は下林氏によって『九州日日新聞』と済々黌の同窓会誌に発表されたが，内容はほぼ同じであった。その後浜田耕作・梅原末治氏も現地を踏査されたが，まとまった報告はなかった。

さらに昭和14年10月毛利久氏によって発表された「肥後国京ヶ峯横穴の一壁面彫刻に就いて」『考古学論叢』14輯の論文は，装飾壁画の真偽問題を扱った重要な研究であっ



付　第２図　長砂連古墳発見当時、下林繁夫氏の写生図（九州日日新聞より）

た。すなわち京ヶ峯の１号横穴上段に浮彫された小形靫の上部にはミズラの人物の沈刻があり，従来この人物像は後世の偽刻であるという説が多かった。これに対して毛利氏は石人石馬と横穴壁画彫刻の不離な関係から，この人物像を真物となしている。確にこの人物像は靫や周辺の彫刻壁画とは表現技法を異にし，背面に負うべき靫の上役に正面向の人物を彫るのはいかにも矛盾する。しかしよく観ると人物の顔面は他の彫刻の部分と同様に，丹で真赤に厚塗りしており，一概に偽刻とばかり決められないものがある。

やがて日本は昭和16年12月８日より完全に戦時体制に入ったが，戦時中には特に重要な遺跡の発見もなく，装飾古墳の研究についても取りあげるべき重要なものはなかった。

戦後における考古学の発展はめざましいものがあった。古代史の科学的解明が強調され，埋蔵文化財に対する関心がたかまるや，考古学は俄かに脚光をあびるようになった。加うるに食糧対策として各地に土地開墾が行われるや遺跡・遺物の発見が相つぎ，こうした機運には一段と拍車がかかった。まず戦後において最初に発掘された装飾古墳は昭和23年３月，熊本語学専門学校の学生たちによる熊本市清水町稲荷山古墳であった。この古墳は石障系石室古墳で，石障の内面に赤[45]・白・青の三色で連続三角形文と同心円文を描いていたが，その後の保存処置がわるく文様は消滅してしまった。ついで同年梅原末治氏は菊水町江田船山古墳の再調査を兼ね，塚坊主古墳の発掘を行われた。その時石室奥の石棺内壁と，両袖石に彩色による三角文や円文の配列があったという。ついで同25年５月には坂本経堯氏によって，荒尾市四ッ山古墳の発掘調査が行われた。この古墳は古く盗掘に会い天井を失なっていたが，巨石で囲んだ石室西壁に，コンパスで描いたらしい円文がうすれながら残っていた。また同29年９月26日には八代市鼠蔵（ぞうぞう）町大鼠蔵山東麓の道路開設にあたり箱式石棺が出土し，乙益が調査した。その内壁には弓と靫・垂下した鏡・短甲・大刀と垂下した鏡（或は鞆か？）を浮彫りにしていた。この石棺には土師器の壺片と高坏を伴い，それらの形式からみると５世紀前半まで遡ることがわかった。[46]

また同31年夏には原口長之氏[47]を中心とする山鹿高等学校の生徒諸君によって，山鹿市熊入弁慶ヶ穴古墳の石室内部の清掃が行われた。そして前室の周壁から赤・白・青で描いた幾何図形文や馬が船に乗る光景・舟に鳥がとまった柩舟らしいものなど，数々の場面をあらわした絵が発見された。すでにこの古墳の第二羨門に描かれた同心円文と，馬が舟に乗る光景は，明治35年頃波多巌氏[48]によって発見され，その時模写された壁画が高橋健自氏の『日本原始絵画』（昭和２年）に引用されている。しかしその頃は原口氏らの調査時ほど豪華で，沢山の絵画があることはわからなかった。その後この古墳は同年12月28日付で国の指定史跡となった。また同34年２月11日より松本雅明氏と蓑田田鶴男は，八代市教育委員会，八代史蹟保存会・肥後考古学会八代支部の協力をえて八代市敷河内（しきかわち）五反田古墳の発掘調査を行った。古墳石室はすでに数回にわたって破壊されていたが，石障壁に円文がならぶ単純な装飾であったが，捩文鏡をはじめ須恵器や玉類，刀子，鉄鏃などが残り，この種の古墳の編年観に有力な手がかりをもたらした。

昭和30年代の終り頃から全国的に地域開発[49]が進行し，各地で遺跡の発見が相ついだ。同39年１月には下益城郡中央村中郡（なかごほり）において，家形石棺の内部に円文と同心円文を描いた装飾が発見され，高島忠平・伊藤奎二・菊池大和・佐藤伸二氏らによって発掘調査が行われた。この石棺は地表下に埋設され，最初から封土があったかどうか疑わしい。県下では時おりこうした封土のない石棺だけの埋葬遺構が発見されることがある。

昭和40年代に入る[50]と開発事業はいよいよ急速化した。同40年には宇土郡不知火町長崎の国越古墳が開墾のため変形されることになり，同年８月には富樫卯三郎氏中心とする

宇土高等学校生徒諸君によって測量調査が行われた。ついで翌41年7月24日には県教育委員会主催のもとに，発掘調査を行った。すでに石室内部は盗掘によって著しく破壊されていたが，奥壁にそって組立てられた平入りの家形石棺には，奥壁と両袖石，棺蓋に直弧文の鍵ノ手文を線刻し，その上から赤と青・緑・白で彩色していた。とくに床面は奇跡的によく保たれ，漢式鏡三面の他多くの貴重な副葬品を出土した。これに併行して県教育委員会では鹿本郡植木町石川山[51]において6基の円墳群を発掘した。原口長之氏によるとうち第4号墳では，羨道に架した石梁の表面に線描きによる絵らしきものが検出されたという。さらに同45年には玉名郡岱明町大原において，線描きの[52]絵らしいもののある箱式石棺（第9号）が発見され，また宇土市笹原町梅崎山でも船を線描きした古墳石材が[53]発見された。とくに昭和52年5月末に発見され，同53年9月から三角[54]町教育委員会主催のもとに発掘調査が行われた，同町大字中村字前畑の小田良（おだら）古墳は，近年にない重要な装飾古墳の発見であった。古墳は本来小封土を有す円墳で内部は石障系の石室があり，その奥壁には左から靫・同心円・楯・同心円・楯・同心円・靫の順に浮彫りであらわす。同心円はいずれも上下から紐で繋ぎとめた形をあらわし，左側壁に4個，右側壁に3個，入口側の壁に2個配置し，昭和54年10月23日付で国の指定史跡となった。以上の他にも県内各地で断片的に発見された例は少からぬものがあり，とくに昭和56年以来熊本県教育委員会が行った基礎調査にさいしては，従来まったく顧みられなかった古墳石室や横穴の内外面から，予想をはるかに上まわる装飾文様や壁画が検出されるにいたった。

一方，戦後になると新しい遺跡・遺物の発見に伴い装飾古墳の研究にもいちじるしい前進がみられた。まず昭和27年に出版された齊藤忠氏の『装飾古墳の研究』（吉川弘文館）は，日本国内だけでなく広く東アジア各地に分布する壁画を有する古墳をも含め，総合的に展開した労作で，その後における装飾古墳研究の手引書となった。また松本雅明氏は『考古学雑誌』45巻4号（昭和35年）に「肥後石貫穴観音の彫刻――大陸文化の滲透と古墳成立の時期――」を発表。その内容は石貫穴観音横穴内部奥壁の千手観音像と軒丸瓦状の突起を，横穴成立期の所産となし，文献史学や美術史的見地から8世紀の所産となす，重大な提言がなされた。この説には今なお強い反対意見もあるが，奥壁の千手観像の一部には石屋形の軒にみるのと同様な赤の彩色の残るものがあり，一概にこの像を後世の追刻とばかり決められないものがあろう。

装飾古墳のことが考古学研究者だけでなく，美術史家やジャーナリズムの面にとりあげられ，まさにブームの状態を呈するようになったのは，昭和39年1月以後のことであった。それは平凡社が雑誌『太陽』№8として「日本の原始絵画」特集号を刊行したことにはじまる。その内容は熊本・福岡県下の最も壮麗な装飾古墳の壁画を選び，カラー写真で紹介したもので，この時からはじめて古墳壁画の色調と迫力が一般に知られるようになった。これより先，昭和36年には朝日新聞社が新聞紙面に「装飾古墳をたずねて」を連載し，熊本日日新聞社でも同39年2月には「夜見国の芸術」を連載するなど，装飾古墳に対する重要性については啓蒙するところ多大なものがあった。ついで同年10月には小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』が出版され，ここに装飾古墳は学問的評価だけでなく，芸術的評価をうけるようになり，多くの画家や写真家に強い関心をもたれるようになった。その後刊行された単行本や雑誌は，すべてカラー写真による図録ばかりで，本質的な問題に取組んだ研究書は少なかった。すなわち昭和40年には斉藤忠氏編『古墳壁画』（日本原始美術4.講談社）が刊行され，同42年には日下八光氏著『装飾古墳』（朝日新聞社）が刊行された。とくに日下氏の大著は従来ややもすると考古学上の観察だけに終始した古墳壁画に対して，画家の立場からみた精密な模写と観察の成果が公開され，大きな研究の前進となった。

昭和45年9月には江川和彦氏の解説による「装飾古墳」が『古美術』31号（三彩社）に掲載され，同47年3月31日には写真，榊晃弘・文，森貞次郎の両氏による『装飾古墳』（朝日新聞社）が刊行された。こうした機運の中で奈良県明日香村の高松塚古墳が発掘されたことは，装飾古墳ブームに一段の拍車がかかることになった。同年6月には『芸術生活』25巻6号が「高松塚と装飾古墳」を特集し，乙益の「装飾古墳とは何か」を掲載している。そして同年10月には佐賀県立博物館主催による装飾古墳特別展が開催され『装飾古墳の壁画』という重宝な図録が刊行された。また同48年に刊行された斉藤忠氏の著『日本装飾古墳の研究』（講談社）は，著者が長年にわたって蓄積された研究成果だけに，そこに扱われた対象は国内だけでなく広く東アジア諸地域についても網羅した，今までにない大冊であった。

昭和49年2月25日には乙益の編著『装飾古墳と文様』（古代史発掘8.講談社）が刊行された。また同年3月熊本県教育委員会が行政上の必要から刊行した『熊本県の装飾古墳白書』は当時としては時宜をえた措置であった。

そして昭和50年7月15日には斉藤忠氏著『古墳の絵画』（日本の美術7.至文堂）が，ついで51年3月20日には松本雅明編写真白石巌による『熊本の装飾古墳』（熊本の風土とこころ7.熊本日日新聞社）が刊行され，ともに重宝な案内書と広く普及した。さらに同53年サンポウデラックス社では『99の迷』シリーズとして矢野和之氏の解説と三沢博昭氏の写真による「甦る古墳文化」を特集した。そして同年12月8日には玉利勲氏の『装飾古墳』（平凡社）が，翌54年には藤井功・石山勲氏の『装飾古墳』（日本の美術6.講談社）が刊行された。このように装飾古墳に関する出版物はほとんどが写真図録集の類で，それらの多くは大同小異ともいうべきものであった。それだけに考古学的立場から真向に取組んだ論文や著書[56]は少い。最近装飾古墳ブームは大分下火になりはじめたが，今後の研究にこそ本格的な成果が期待されよう。それとともに古墳や壁画の永久

保存を目的とする，抜本的な研究と対策が恒常的に進められるべきであろう。

註

1　三島格「熊本県大野窟古墳」九州考古学19（昭和38年）

2.『肥後国志』下巻種山手永大野村の条。（九州日日新聞社）

3．梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下に於ける石人と其の表飾の古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊（大正14年）

4．註 3．渡辺正気「萩尾古墳」小林行雄編・藤本四八撮影『装飾古墳』（昭和39年）

5．昭和39年，石人石馬研究会の三ノ宮古墳実側にさいし，三島格氏らによって発見された。

6．乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11（1962年）

7．梅原末治「宇土郡不知火村古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』（京都帝国大学文科大学考古学研究報告第1冊，大正6年）

8．文面にいう八尾神社とあるのは永尾神社のことか？

9．浜田耕作「肥後国飽託郡西里村釜尾の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊）（大正8年）

10．波多巌「肥後国平小城村古墳チブサン石棺及び模様について」考古学雑誌3巻2号（大正元年）

11・12．田辺哲夫編『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社（昭和55年）

13・14．『鹿本町史』（昭和51年）

15．梅原末治「肥後国上益城郡今城の大塚」『註9』

16．梅原末治「芦北郡日奈久町古墳」『註7』

17．この古墳の発見年代については『新撰事蹟通考』には寛政年間(1789～1795)とみえ，京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊によると，現地調査が行われた大正5年当時から60余年前といい，約半世紀前後の誤差がある。

18．井寺村はここでは沼山津手永に属しているが『肥後国志』（明和9年迄）には鯰手永に属していた。

19．熊本女子大学蔵木版本による。

20．矢野一貞『筑後将士軍談』上・下2冊（昭和2年活字本刊行）

21．『玉名郡誌』55～56頁（明治42年）

22．梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告上・下」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1冊（大正11年）

23．『博覧会品物録』上下2冊（明治8年）熊本市呉服町開花堂

24・25．県内の物産ならびに美術品，古器物を陳列した博物館のようなものであったが，明治35年には産業面を強化し物産館となった。

26．県立図書館の設立（明治44年）後，その隣に設けた小博物館で県教育会によって運営されたが，昭和20年の戦災で焼失した。しかし陳列品の主なものは熊本城顕彰会に引きつがれ，現在熊本博物館に出陳されている。

27．E・Sモース・石川欣一訳『日本その日その日』（東洋文庫，平凡社）（昭和46年）この石棺は現在行方不明。
髙木恭二「肥後南部の石棺資料」（三）『宇土市史研究』第4号（昭和58年）

28．この落書は明治10年前後頃，当時の宇土町内に住む一少年が友人と現地に遊びに行き，小刀の先でいたずらしたものという。（昭和30年頃，鎮西高校教諭であった某氏の談による。）

29．若林勝邦氏は明治23年当時宮内省にあって庶務課長をつとめていた。その踏査記は『古墳発顕記録』にみえる遺跡の確認再調査であった。

30．井寺古墳の直弧文壁画は大野雲外の「日本古墳紋様考」『東京人類学会雑誌』143号や，八木奘三郎『日本考古学』農商務省『稿本日本帝国美術史』などに紹介された。中村徳五郎は「阿蘇中部の旧跡について」を『九州日々新聞』（明治40年）に発表。これは後に「阿蘇中部の旧蹟及び古墳に就いて」『歴史地理』43巻6号（大正13年）として再録された。

31．三島格「明治中期の熊本県考古学」『肥後考古』4（昭和59年）26頁によると，福原岱郎氏は別に「午橋生」というペンネームを用いた。

32．『註3.』31頁「鹿本郡臼塚と其の石人」にみえる「学生某」が中島秀雄氏であることは，昭和26年頃氏から直接聞いた。尚，中島氏は鹿本中学・早稲田大学出身。大阪毎日新聞福岡支局長・サイパン日報社長を歴任。昭和23年より同28年まで熊本県教育庁社会教育課嘱託として文化財行政面を担当し，多くの業績を残された。

33．「肥後国上益城郡今城大塚」『註9』32頁。

34．「飽託郡小島町千金甲高城山古墳群」『註7』

35．「高瀬付近の遺跡」『註7』

36．「人吉付近の遺跡」『註7』

37．「肥後国下益城郡杉上村の古墳」『註9』

38．「肥後国下益城郡松橋の古墳」『註9』

39．『註7』序言による。

40．熊本県教育会『史蹟調査の栞』（大正5年）より。

41．椎名慎太郎『精説文化財保護法』（昭和52年）

42．「肥後国八代郡龍峯村の古墳」『註9』

43．「肥後国天草郡維和村の古墳」『註9』

44．昭和39年春，現地踏査の折確認

45．高士與市「稲荷山古墳研究」『考古学報』第1冊（昭和24年）プリント版

46．坂本経堯『四ツ山古墳』（昭和25年）

47．乙益重隆「八代市大鼠蔵山古墳―肥後に於ける箱式石棺内葬について―」『考古学雑誌』41巻4号（昭和31年）

48．原口長之「装飾古墳弁慶ヶ穴調査報告」『熊本史学』11号（昭和32年）

49．松本雅明「敷河内五反田古墳調査報告」『熊本県の文化財」第1集（昭和36年）

50．高島忠平・菊池大和・佐藤伸二・伊藤奎二「熊本県中郡楠原の装飾ある家形石棺」『熊本史学』31号（昭和41年）

51．乙益重隆「国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』（昭和42年）

52．原口長之「石川山古墳群」『同書』

53．松本雅明編『熊本の装飾古墳』30頁。熊本日日新聞社（昭和51年）

54．富樫卯三郎・清見末喜「梅崎古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』第20号（昭和43年）

55．『小田良古墳』『三角町文化財調査報告』三角町教育委員会（昭和54年）

56．装飾古墳についてはここに掲げた出版物だけではなく，考古学古代史の講座本にしばしば取り上げられた。森貞次郎「装飾古墳の発生まで」「装飾古墳の展開」『古代の日本』3（角川書店・昭和45年），乙益重隆「装飾古墳」『新版考古学講座』原史文化下（雄山閣・昭和45年），乙益重隆「埴輪・石人石馬・装飾古墳」『東アジア世界における日本古代史講座』4（昭和55年）などはその代表例で，他にも数篇がみられる。